

研究・調査報告書

報告書番号	担当
463	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名（原題／訳）：	
Risk factors for ischaemic and intracerebral haemorrhagic stroke in 22 countries (the INTERSTROKE study): a case-control study. 22 カ国における脳梗塞、脳出血の危険因子についての検討	
執筆者：	
O'Donnell MJ, Xavier D, Liu L, Zhang H, Chin SL, Rao-Melacini P, Rangarajan S, Islam S, Pais P, McQueen MJ, Mondo C, Damasceno A, Lopez-Jaramillo P, Hankey GJ, Dans AL, Yusuf S, Truelsen T, Diener HC, Sacco RL, Ryglewicz D, Czlonkowska A, Weimar C, Wang X, Yusuf S; INTERSTROKE investigators.	
掲載誌（番号又は発行年月日）：	
Lancet. 2010 Jul 10;376(9735):112-23. Epub 2010 Jun 17.	
キーワード：	
飲酒、脳卒中、危険因子、症例・対照研究	
<p>要 旨</p> <p>目的： 世界的な、特に低～中所得の国々における様々な危険因子の脳卒中への寄与は解明されていない。脳卒中とその病型に対する危険因子の寄与を明らかにする。また、脳卒中と心筋梗塞のリスクの違いについて解明する。</p> <p>方法： 2007年3月1日から2010年4月23日の間、世界22カ国において標準化された症例・対照研究を行った。症例は初発急性期の脳卒中患者（発症後5日以内、入院後72時間以内）とした。対照は脳卒中既往がなく、症例と性別および年齢を合致させた。全ての対象者に標準化された質問票、身体検査、血液検査、尿検査を実施した。オッズ比（OR）と95%信頼区間（95%CI）、人口寄与危険度（PAF）を算出し、脳卒中、脳梗塞、脳出血に対する危険因子の寄与を明らかにした。</p> <p>結果： 初発3000例（脳梗塞78%、2337例、脳出血22%、663例）と対照3000例における全脳卒中の統計的に有意な危険因子は、高血圧既往（OR(95%CI)=2.64(2.25-3.08),PAF(95%CI)=34.6%(30.4-39.1)）、喫煙（OR2.09(1.75-2.51),PAF(95%CI)=18.9%(15.3-23.1)）、waist-to-hip ratio（OR(95%CI)=1.65(1.36-1.99),PAF(95%CI)=26.5%(18.8-36.0)）、運動習慣（OR(95%CI)=0.69(0.53-0.90),PAF(95%CI)=28.5(14.5-48.5)）、糖尿病（OR(95%CI)=1.36(1.10-1.68),PAF(95%CI)=5.0%(2.6-9.5)）、飲酒（一月30杯以上の飲酒や多量飲酒）（OR(95%CI)=1.51(1.18-1.92),PAF(95%CI)=3.8%0.9-14.4)）、精神的ストレス（OR(95%CI)=1.30(1.06-1.60),PAF(95%CI)=4.6(2.1-9.6)）、抑うつ（OR(95%CI)=1.35(1.10-1.66),PAF(95%CI)=5.2%(2.7-9.8)）、心疾患（OR(95%CI)=2.38(1.77-3.20),PAF(95%CI)=6.7(4.8-9.1)）、アポたんぱく B/A1（OR(95%CI)=1.89(1.49-2.4),PAF(95%CI)=24.9%(15.7-37.1)）であった。これらの危険因子により全脳卒中の88.1%は説明可能であった（PAF(95%CI)=88.1%(82.3-92.2)）。高血圧既往の定義を高血圧既往または160/90mmHg以上とした場合、上記PAFの値は90.3%(85.3-93.7)であった。これらの危険因子は脳梗塞についても統計的に有意であった。一方、脳出血については高血圧、喫煙、waist-hip ratio、飲酒が統計的に有意な危険因子であった。</p> <p>結論： 脳卒中の90%は主要な10個の危険因子との関連を認めた。血圧の降下、喫煙対策、運動習慣や健康的な食習慣の促進により脳卒中の減少が可能であろう。</p>	